

辞書作りの現場から その①

『大辞林』

辞書出版部 国語辞書第二編集室

辞書出版部部长／『大辞林』編集長

山本 康一



一冊ものの大型国語辞典

初版の『大辞林』は企画から刊行まで二十八年かかったといわれています。一九八八年に初版が出ていますので、企画そのものは今から五十年以上前のこととなります。『大辞林』は古代から現代までの国語項目に加えて、人名、地名、作品名、固有名詞を含む百科語と専門用語、術語を含めて二十万を超える項目を掲載しています。これだけの項目数なので、二百人を超える方々に執筆もお願いしてきました。国語辞典の分類としては中型辞典ですが、一冊もの大型国語辞典ともいえるでしょうか。

私は、九三年入社なので、九五年に刊行された第二版から関わりました。入社してすぐ、編集部員として改訂作業に関わりました。当時、編集部は六、七人ぐらいの体制でしたが、もちろんそこには外部の協力者、校正者の方もいましたから、実際に編集作業に関わる人数は、それ以上です。続く第三版では、企画や検討での関わりでしたが、その一環として、辞書を紙とデジタル（ウェブ）の両方で使える「デュアル・ディクシヨナリー」の制作に携わりました。

時代の変化をとらえる

『大辞林』は初版二十二万語、第二版は二十三万三千語、第三版は二十三万八千語収録しています。加えて、ウェブなどの電子媒体のみ

に掲載している項目もあるので、現時点で、総項目数は二十六万三千。日々増え続けています。

改訂時には、時代の変化をとらえ、これら二十万を超える収録項目の見直しをしてみました。

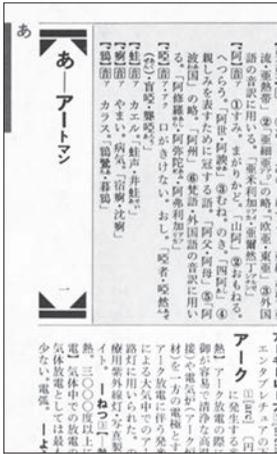
第二版（一九九五）の時は、社会の複雑化に伴って流通するようになった多様な言葉の対応という視点から、百科語の増補が目立ちました。

第三版（二〇〇六）刊行時は、インターネットが普及しはじめてから十年が経過し、百科的な情報へのアクセスの仕方がまるで異なっただけで即時に得られることから、書籍への期待は相対的に減ってしまい、第三版では、むしろ国語項目に注力することにしました。国語辞典としての基盤によりみがきをかけ、百科的な情報や時事的な用語は、ウェブ版の「デュアル大辞林」（書籍の第三版を買った方が無料で利用できるサービス）で常時増補していく、「デュアル・ディクシヨナリー」というかたちをとりました。

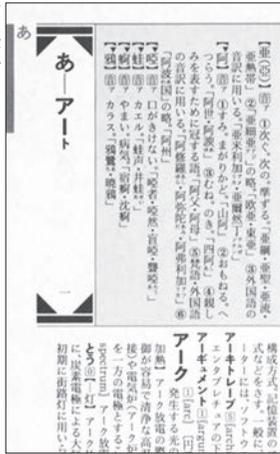
電子媒体では最新の要求に応え、紙媒体では、中身も情報量も
いっばんの使いやすさで応える

電子媒体の辞書には、時代を反映して新しい語や語義・用法を次々に取り入れていけるといふ長所があります。新聞、雑誌などのメディアをはじめ、多方面にわたり、時事用語、新語、

初版



第二版



第二版では、余白側へ柱をずらし、行数を増やした

製本機にかけられる限界の厚さ

流行語など、最新の言葉を観察し、集めてくれるチームがいます。

一方、紙の辞書には物理的な制約があります。このように常時項目を増補していても、改訂の時には、収録項目を取捨選択する作業に直面します。できるだけ多くの項目を収録するために、紙を薄くしたり、ページ数を増やしたり、工夫をするのですが、実は、『大辞林』の厚さは、すでに、製本機にかけられる限界の八センチぎりぎりなんです。つまり、製本できる最大の厚さにあるということになります。

この限界は一面では制約です。しかし、一冊で手元におけるというのが中型辞典の利点だと思えますし、人の扱う情報は、このぐらいの規模が適当だと思っているところもあります。例えば検索サイトなどである言葉を検索した場合、何百万と候補が出てくる場合があります。これに全部目を通すことはできません。また、解説の分量があまりに多すぎても、かえって混乱します。簡潔に知りたい言葉を知る、情報・知識への入り口としての役目を果たすためには、ある分量にとどめることも必要だと思えます。

紙の辞書ならではの工夫もあります。同じような紙面ですが、よく見ると、版ごとにデザインが少しずつ違うんですよ。本のデザインは、エディトリアルデザインの世界を牽引してきた杉浦康平事務所に初版から第三版までお願いしています。先ほどお話ししたように、紙の辞書の

場合、物理的な制約があり収録できる項目数が限られますが、杉浦さんは、限られた中で、たくさん項目を入れられるデザインの工夫をしてくださっています。たとえば、柱の入れ方を工夫することで、初版と第二版では一段の行数が変わりました。第三版では、余白を少し狭くして、行数を増やすこともしています。

電子媒体で常に項目を増補しながら、ある時点で、分量の制約をとまなう紙の辞書の編集を行う意義とは、時代に必要とされている項目を厳選し、時代の記録として一冊にまとめるというところにあると思うのです。

紙の辞書は一定期間の時代の記録を残す存在であり、日々項目が増え続ける電子媒体の辞書は、紙の辞書に載るもの、載らなかったものも含めて、通時的に言葉の総体を記録し続ける存在である。今の時代には、その両方が必要だと感じています。

**知りたいという要求に広く応えられ
る本でありたい**

辞書というのは、その時代の言葉の記録にもなっています。『大辞林』は、その時々に出てくる言葉、国語項目も含め、百科関係、時事用語であったり、新しく出てきた語や用法に向き合っていて、常に言葉に関して知りたいという要求に応えられる辞書でありたい。そのために辞書の改訂に力を注ぎ続けていきたいと思っています。(談)